



<企業情報>

スズキ株式会社
〒432-8611 静岡県浜松市
中央区高塚町300

<事業内容>

四輪車・二輪車・船外機・電動
車いす等の開発・製造・販売を
行う総合モビリティメーカー。



IT本部長
デジタル化推進部長
野中彰氏



IT本部 ITシステム部
開発基盤・モデリング課 主幹
菅沼教多氏



IT本部 ITシステム部
開発基盤・モデリング課
佐藤文香氏

部門ごとに縦割りのシステムを超え、データを相互 利用できる環境を、Denodoで構築

スズキ株式会社では、部門ごとに縦割りのシステムが、業務改革や新規業務の創出を進める上で壁となっていました。こうした状況を変えるため、同社ではDenodoを導入。システムやデータソースの違いを超えて、必要な時に誰もがデータを活用できる環境を整備しました。「業界ナンバーワンのDXチーム」を目指す取り組みの一環として、全社的なデータ基盤としての活用を進めています。

データの民主化を進め、必要なデータに 誰もが容易にアクセスできる環境を作りたい

日本を代表する自動車メーカーとして、軽自動車やコンパクトカー、二輪車、船外機など多岐にわたるモビリティ製品を展開しているスズキ株式会社（以下、スズキ）。1909年の創業以来、時代の変化に合わせた製品を数多く世に送り出してきました。現在では、世界各地に生産拠点を展開し、高い品質と効率的な生産体制で、グローバル市場でも大きな存在感を示しています。

現在、自動車業界には、「自動運転」や「電動化」「シェアリング」といった新たな波が、押し寄せています。また「コネクテッド化」による車のICT化や、これらを実現するための新たなアイデアや取り組みが求められています。

時代に対応し、新しい仕事をするためのひとつの壁が、部門ごとに縦割りのシステムでした。システムの壁について、IT本部 ITシステム部 開発基盤・モデリング課 菅沼教多氏は次のように話します。

「スズキでは長く、部門ごとに縦割りのシステム運用がされてきました。そのため自分が10年前に入社したときも、自分の周りの人がシステムやデータをどう利用しているのか、理解するのに非常に時間がかかりました。新しいことをしようと思っても、必要なデータを手に入れるのに時間がかかり、自分の中で、理想のデータ利用との大きなギャップになっていました」（菅沼氏）

生産本部 機種統括部 全体統括課 西谷諒太氏は、スズキでは、小・少・軽・短・美という理念のもと製造を行っています。そのため、製造に使うシステムも必要最小限な仕様に基づいて作られており、長い間使っているものも多く存在している、と話します。

「データを手に入れるために、日々使っている仕組みをすぐには変えられませんでした。部門・工程ごとでデータが閉じていたり、工場ごとに分断され、それぞれの形で持っ持っているため、全体を横断的に見るのが難しい状況でした」（西谷氏）



IT本部 ITシステム部
開発基盤・モデリング課
野田宗裕氏



生産本部 機種統括部
全体統括課
西谷諒太氏



グローバル営業統括部
海外事業業務部
業務プロセス革新課 課長
仲江川容亮氏

「業務を変えようと思っても、必要なデータがそもそもどこにあるかわかりません。システムごとにデータの保管場所が異なっているので、まずは統合して全体を可視化できるようにしないと判断できないと考えていました」(グローバル営業統括部 海外事業業務部 業務プロセス革新課 課長 仲江川容亮氏)

データ利用の重要性について、IT本部 ITシステム部 開発基盤・モデリング課 佐藤文香氏も、次のように話します。

「前職でも、図面の管理などでデータは非常に重要でした。スズキでも同様に、データの力で業務を支えたいと考えていました。しかし、肝心のデータがすぐに利用できない状況でした」(佐藤氏)

こうした状況でのデータ利用について、IT本部 ITシステム部 開発基盤・モデリング課 野田宗裕氏は「ピア・ツー・ピアが“たすき掛け”になっているような状態”だったと振り返ります。

「別のシステムでデータが必要な時は、システム間のデータ連携が個別に構築されていて、それらが複数存在していました。各システムで構成も異なるので、データ連携の構築にも時間がかかります。データハブのような仕組みが作れば、と考えましたが、個別につながり合っているシステムを整理して統合するとしても時間がかかる。効率的に接続できる別の方法を探していました」(野田氏)

保守や拡張性を考慮し、物理統合から Denodoでの仮想統合へシフト

各システムでサイロ化されたデータを、相互利用できるようにしたい。この課題を解決するため、当初、スズキでは、物理的なデータ統合を検討していました。ひとつのデータベース管理システムに、各システムから主要なデータをコピーして集約する方法です。

「各システムからデータを抽出・変換・格納する、従来型のETLの手法で統合を試みていました。実際に取り組んでみて分かったのは、開発や保守の負担が大きく、スケラブルではないということです」(菅沼氏)

こうした中、出会ったのが、Denodoによる仮想化でした。

「2022年の1月頃、イベントで紹介されているのを社内メンバーが知って、そこからDenodoに関心を持ちました。仮想化という概念自体は、データをビューとして1つの基盤上に作成するというので、すんなりイメージできましたが、異なるデータベースのデータを仮想的に統合したビューが物理統合よりもレスポンスが出る場合もある点には、最初は懐疑的でした」(菅沼氏)

スズキではデータ統合ソリューションの調査を経て、2022年9月よりDenodoのPoCを開始。PoCではデータソースへの接続やAPIの作成が想像以上に簡単で、操作性にも手応えを感じたと、菅沼氏は話します。

「導入のポイントとなったのは、データカタログです。一般的にデータカタログはメタデータの閲覧がメインで、データエンジニアを対象にした製品が多いのではないかと思います。Denodoのデータカタログは、データの検索が簡単にできてExcelなどでダウンロードする事もでき、データコンシューマとなる一般ユーザも使う事を想定した設計になっています。データの民主化を実現するために必要な機能が揃っていることを確認し、ここが導入の決め手になりました」(菅沼氏)

2022年の年末には、Denodo導入の準備がほぼ完了。年始から本番環境での運用をスタートしました。

Denodoの導入によって、多くのシステムで個別に管理されているデータが簡単に取り出せるようになったと、佐藤氏は話します。

「開発の進捗を可視化したかったのですが、以前はExcelで各設計者に進捗を聞く

必要があり、6000ものファイルを管理していました。それが今ではDenodoのカスタムビューを使って一括で閲覧できるようになり、関係者全員が助かっています。工場でも、工程ごとの情報を横断的に閲覧できるようになり、確認作業の効率も格段に上がりました」(佐藤氏)

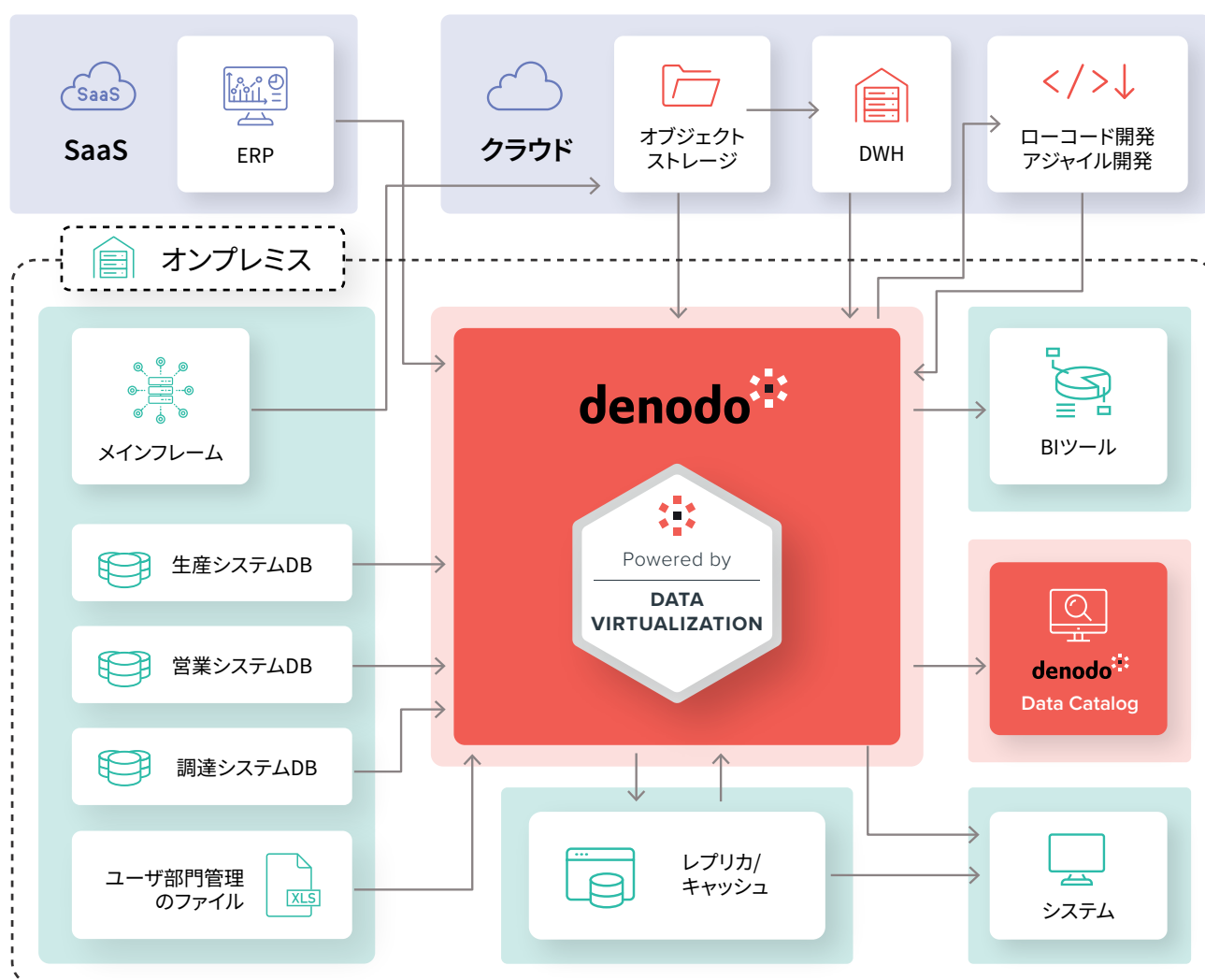
以前はデータベースに詳しい人しかできなかったメタデータの検索も、Denodoの画面から検索して必要なデータが見られることで、SQLを書けなくてもデータにアクセスできるようになりました。

「これまでは、必要なデータがどのデータベースに格納されているのか分からず、まずはそこを探るところからでしたが、今はDenodoにアクセスすればよいので、データへのアクセス効率が非常に上がりました」(西谷氏)

「従来は、何かデータを見せたい場合は、画面や帳票などをきっちり作ってから見てもらう必要がありました。今では、Denodoのデータカタログを見れば内容を確認できますし、さらにそこからBIツールに連携して、短期間で可視化が可能になりました」(野田氏)

また、これまでは必要に応じて個別にシステム接続していた状況も、Denodoによってデータ統合が進んだことで変わりつつあります。

今回のDenodo導入について、「BIツールを利用するための土台として、とても大きな役割がある」と、菅沼氏は話します。「各データがBIツールと連携しやすくなったことで、分析・可視化のスピードも飛躍的に向上しました。以前はどれが最新版なのか、元のシステムで確認が必要だったものも、Denodoを経由することで、常に新しいデータをBIツールで見られるので、以前に比べて作業がシンプルになり、可視化が早くなりました」(仲江川氏)



1000以上のデータソースへの接続も見据え、 データドリブン経営を支える全社データ基盤へ

自動車業界に起きている変化について、自らデータを扱えることが求められると、IT本部長 デジタル推進部長 野中彰氏は話します。

「自動化やコネクテッド化など、車のIT化が進む中、これからの競争相手は同業他社ではなく、まったく異なるフィールドからやってくると考えています。だからこそ、自分たちでデータをハンドリングして、現実を理解する力を持つことが重要です」
(野中氏)

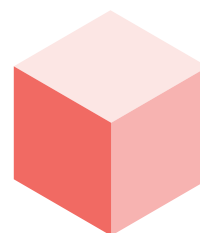
こうした中、スズキでは3年前から、「業界ナンバーワンのDXチームになる」という目標を掲げて、役員や本部長向けにIT研修会をスタートしています。

「研修では、社長や副社長にBIツールを実際を使って業務データから必要なデータの抽出や可視化を体験してもらい、実践的にデジタルへの理解を深める機会を作ってきました。取り組みの結果、データ活用やデータ処理はIT部門に任せた、という空気から、今は、データ活用は自分自身の課題であり、データは自分が使いこなすものだという意識に変わってきています」
(野中氏)

Denodoを導入した今、スズキでは更なるデータ活用を進めるため、さらに社内システムの接続を進めていく方針です。

「ユーザーが“やりたい”と思ったときに、すぐに必要なデータにアクセスできるようにしておきたいです。社内にはシステム以外も含め、1000以上のデータソースがあります。必要とされるものから、順次接続していくことで、よりDenodo活用の価値が高まっていくと考えています」(菅沼氏)

スズキでは、データカタログやガバナンスの整備を進めながら、「誰もが使えるデータ環境」のさらなる充実を図っていきます。データを起点とした意思決定と、変革を加速するデータドリブン経営の実現に向けて、DenodoがスズキのDXを支えていきます。



denodo 